２０２３年６月１８日（聖霊降臨後第３主日、特定６、A 年）
牧師メッセージ
「遣わされ、結ばれる」
（マタイによる福音書 9:35-10:15）

司祭ヨセフ太田信三

主イエスの語ること、なさったことの基には、いつも「群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。」という、「憐れみの思い」がありました。憐れみと訳されているのは、「はらわた」を意味する名詞から派生した単語です。古代の人々は心臓を理性や意志の働く場所として考え、「はらわた、内臓」を感情の座として捉えていたようです。中国の故事による「断腸の思い」という言葉にもそのような感覚が読み取れます。主イエスの「憐れみ」とは、腸がちぎれる程の痛みを伴うものだったと想像することができます。弱り果て、地にうなだれこむ群衆を見つめる主イエスの眼差し。そしてその思い、共感、共苦のいかに深いことでしょうか。主イエスはその深い憐れみにより、十字架上へ自らの命を差し出しました。それゆえに、この十字架を通してこそ、すべての人は神の愛を知らされ、神に再び結ばれるのです。天と地の間にたてられたその十字架が、神とすべての人とを結びます。

この主イエスの役割を教会は受け継いでいます。その教会の働きは、自らの命をも差し出した主イエスの深い憐れみ、他者への深い共感、共苦の上になされなければならないのだということです。主イエスの「思い」がそこにあるからこそ、教会は「天の国は近づいた」と宣言し、その使命を果たすことができます。そのために、わたしたち自身が日々、主イエスの「思い」に生かされ、励まされ、変えられなければ、わたしたちの働きは虚しいものになってしまいます。使徒たちは学問的にも、立派な弁論術もありませんでした。その彼らが何を伝えられるというのでしょうか。それこそ、彼らの姿、何も持たない姿そのものです。身なりや外見、知識ではなく、ただ神の憐れみに生かされ、他者を愛そうとする姿です。悲しむ人の隣で差し出すお金は無くとも、共に泣くことができる。空腹の人に差し出すパンは無くとも、共に「日毎の糧をお与えください」と祈ることができる。その深い相手への思い、自らもはらわたに強い痛みを感じつつする行いからこそ、にじみ出るものがあるのです。主イエスは、『平和があるように』と挨拶した先で拒まれたなら、その平和はあなたがたに帰ってくると言われました。なぜなら、拒まれたことで、今、不正義の中で打ちひしがれる人に共感する心が与えられるからです。その共感、共苦によって、あなたと今打ちひしがれている人は結ばれる、まことの平和がそこに生まれる、そう主イエスは言われているのです。

「ただで受けたのだから、ただで与えなさい。」と主イエスは言いました。すべてのものは主の賜物、と毎週礼拝で言っておきながら、それを自らのためだけに用いるならば、そこに「天の国」はありません。十字架上で両手を広げ、命をも差し出す主イエスの姿を見続けましょう。そしてわたしたちもまた、握りしめているものを手放し、両手を広げて歩んで参りましょう。